

独立行政法人

地域医療機能推進機構 (JCHO)

熊本総合病院だより

ぱとす



第46号

2024年
秋号

Volume 12 Number 4 October 2024

熊本総合病院大ホール（最大350名収容）は
「心臓病の市民公開講座」で満席になりました



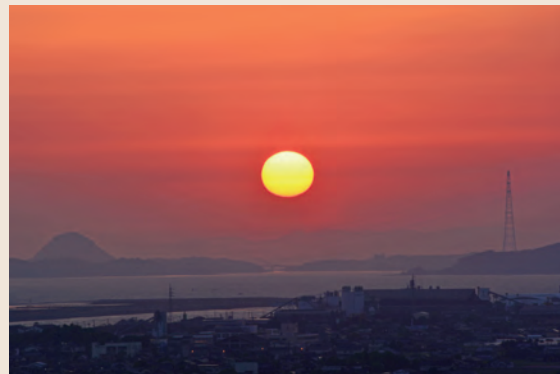
死してのち已む

今年の夏はとんでもない猛暑でそれが10月初旬まで続きましたが、ようやく秋を感じさせる季節となりました。皆様におかれましては如何お過ごしでしょうか。

当院は、皆様方のご支援の下、一丸となってさらに質の高い急性期医療の実践を行ないながら、JCHOの使命である「地域医療・地域包括ケアの推進」に向けて貢献するように最大限の努力をして参ります。そして、このように努力できますことは、医師会、熊本大学教授陣、国・県・市行政ならびに市民の皆様方のご支援の賜と深く感謝申し上げます。



実は、八代の中心市街地の区画は、測ったように東西南北となっていますので、当院の本館玄関は真南、北館は真北を向いております。そして、私の小さな病院長室に繋がる応接室の窓は真西にありますので、春夏秋冬の季節がはっきり感じられます。すなわち、西の天草に沈む太陽の位置が1年でダイナミックに約60°も南北に振れてしまいます。そして、秋分の日には真西の天草松島に沈み、夕日の色も写真のように次第に茜色に変化し、そういう訳で今年もまた秋の感傷に浸っているところです。



ところで、皆様方も名付け親になられている方も多いかと思いますが、「昔は主に母方の祖父が命名する」そうで、私事で申し訳ございませんが、私も娘夫婦の依頼により2人の男孫の名付け親となりました。

第一子の孫の名前は、「一燈」です。平安時代に比叡山延暦寺を開いた最澄の「一燈照隅万燈照国」という言葉がございますが、「最初は一隅を照らすような小さな灯火でも、その灯火が百、千、万と増えれば、国中を明るく照らすことになる」という意味だそうです。また、

江戸時代の儒学者である佐藤一斎の「言志四録」の言葉は、「一燈を提げて暗夜に行く。暗夜を憂うること勿れ、只、一燈を頼め」です。ところが最近、残念なことに、娘から「麺屋一燈」というラーメン屋さんが既にあるというクレームが入りました。

第一子の説明は長くなりましたが、第二子の孫は、「斯道」です。「斯道」とは、「人として生きる仁義の道」でございます。私は勝手に、仁は「思いやりの心」、義は「公に一肌も二肌も脱ぐ心」と解釈しております。

「一燈を提げて仁義の道に行く」ことは極めて困難ですので、この二人の孫の有り様を見ていると、正に、将来、「名前負け」と言われるのは必至です。しかしながら、私自身には無理でしたので、将来、孫にそのような人間を夢としていた祖父がいたことで許してもらえれば、我田引水、恥ずかしながら、名付けの任務だけは果たせたのではないかと考えている次第です。

そして、切に希望することは、情熱を持って精進を続け、「死してのち已む」という気概でございます。

今月始めには、石破新内閣が発足致しましたが、聞くところによりますと様々な方面からの強い懸念もあるようで、日本の内閣には是非、「仁義の国、日本」の毅然とした真骨頂を国内外に未来永劫に示して頂きたいものです。

さておき、わたくし共の熊本総合病院は、本年度も引き続き全職員が一丸となって、「医療とともに、公に一肌脱ぎ」ながら「医療のみならずまちづくりにも貢献する」意気込みで、地方創生・人口増加・少子化阻止にも少しでも寄与できるように、さらに精進して参ります。皆様方のさらなるご支援を何卒宜しくお願い申し上げますとともに、本格的な秋に向かいまして、皆様方のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

令和6年 10月吉日

進化し続ける中央手術センターと麻酔のはなし

麻酔科部長 谷本 宏成

中央手術センターのはじまり

昨年、2023年11月に中央手術センターはさらに進化しました。

2012年以前の旧病院手術部は玄人好みで味のある設計でしたが、時代の潮流に乗りおくれ古い手術室という印象でした。2012年の新病院竣工を機に名称も中央手術センターと改め、4室から6室へ増室し**最新の手術室へと生まれ変わりました**。

外科医にとって手術室は舞台であり全ての修練はその舞台で花開きます。舞台は数多ありますが、私達は最高の舞台を用意することにしました。手術センター更衣室のドアをあけると空気が変わります。ドアの先は舞台へと続く道です。更に進むと大きく数字の描かれたドアの前にたどり着き、その先に最高の舞台があります。まばゆい白を基調とした清潔感あふれる手術室です。

設備も最高の物を揃え、あらゆる手術映像は記録保存されるようになりました。見学者のほとんどは驚嘆し、**それ以降に建設された手術室の見本**となりました。まさに、その当時の最先端の手術室でした。

それから12年が過ぎ、今なお我々の手術室は完成度が高く見劣りすることはありませんが、急増する手術件数への対応とさらなるビジョンから**中央手術センターの拡充**を決めました。

検討に検討を重ね、**2部屋増室し合計8室**になりました。その中の1部屋は、ハイブリッド手術室への対応を見据えて広大なスペースを有しています。手術室の広さは圧倒的な付加価値をもちますが、この部屋は訪れた人をまさに広さで圧倒します。**国内最大とも言われており、ロボット機器や人工心肺装置などの巨大で複雑な手術機器を運用**してもそれらが小さく見えるほどです。映像設備もさらに磨きをかけ、**手術映像は録画**



ハイブリッド手術室への対応を見据えた広大なスペースの第7手術室(12m×10m)

保存だけでなく瞬時に電子カルテに転送され情報の共有化が格段に進みました。我々はまたしても**最高の手術室（舞台）を作りあげることに成功**しました。中央手術センターは常に進化し続けています。

麻酔とは

麻酔科医の主な業務は**手術麻酔**ですが、一口に麻酔と言いましても、**局所麻酔、半身麻酔、全身麻酔やそれぞれの組み合わせなど様々**です。麻酔科医は手術内容、患者様の多様な背景を考慮して最善の麻酔を提供すべく努力を重ねておりますが、最善の麻酔とはいったい何でしょう？

麻酔黎明期には手術の痛みをとることが最善の麻酔であり、安全よりも痛みをとることが優先されました。痛みをとることが普通になると安全が求められるようになりました。時代とともに**「最善の麻酔」というものは変化します**。つまり、「最善の麻酔」というものは常に追いつけるものであり、施設ごと麻酔科医ごとに異なります。

手術というのは外傷です。外科医のたゆまぬ努力の結果、ロボット手術に代表される低侵襲かつ高度な技術が実用化されました。それでも体には多大なストレスがかかり一時的に体は弱ります。患者様は不屈の精神でリハビリをこなし、元の元気な体に戻っていきます。

最善の麻酔とは、手術ストレスを可能な限り取り除き、不屈の精神がなくとも自然とリハビリが進み、体の回復をサポートするものだと考えています。一言でいえば、患者様をはやく元気にする麻酔です。最適解はまだ見つけていませんが、周術期の患者様の経過を詳細に追いかけるながら最善の麻酔に近づけるように取り組んでいます。

手術センターは手術室スタッフ、外科医、臨床工学士など**多職種の協働**で成り立っていますが、その思いは患者様がよりはやく元の元気な体に戻っていくことです。手術に臨まれるにあたり不安なことが沢山あると思いますが、**我々スタッフ全員でサポートしていきます。安心して下さい！元気になりましょう！**



手術室スタッフ(谷本部長:前列中央)

地域の健康促進に貢献する最新の医療情報を発信する病理診断科

病理診断科副部長 大園 一隆

当院病理診断科は**常勤病理医2名体制**で、質の高い病理診断を目指しております。ゲノム医療の進展に伴い、**最新の分子遺伝学的知見を地域医療に最適化した形で反映させた病理診断**を提供できるよう、学術的な活動にも力を注いでおります。

2024年度7月6日には、九州沖縄の病理医にとって記念すべき学術集会である「**第400回九州・沖縄スライドカンファレンス**」を当院で開催する機会を頂きました。当院北館5階大ホール（2023年3月オープン、350人収容可）において、**現地とWEB参加のハイブリッド形式**で、**181名の病理医**が参加しました。**第400回記念特別イベント、16題の症例発表**



一般演題発表

を含むタイトな日程の中、会の開催・会場設営・託児所の準備等に関しまして、当院病院長をはじめ、病理診断科・臨床検査センター・事務のスタッフの協力のお陰で、大規模な会を滞りなく執り行うことができました。

会を運営する日本病理学会九州沖縄支部は、会員数**446人**、所属施設**147**を擁し、**九州沖縄の病理医のほぼ全員**が所属しています。年6回開催、**1957年から現在まで400回**も続く、全国でも類を見ない**伝統的な診断病理の会**であり、**質の高い病理診断の提供につながる最新の医療情報を発信する場**となっております。

当院で、歴史ある本学術集会の**400回**記念を開催できたことは大変光栄であり、**スタッフのモチベーション向上**にもつながりました。今後も病理医という立場から、**八代を含めた九州沖縄の皆様の健康促進に貢献**できるよう、最新の医療情報の発信にも努めてまいります。



猪山 賢一 部長



大園 一隆 副部長

当院が「一次脳卒中センターコア施設」に認定

脳神経外科医師 谷口 あゆみ

当院は、2024年9月に日本脳卒中学会より「**一次脳卒中センター（PSC）コア施設**」として認定を受けました。熊本大学病院、熊本赤十字病院、済生会熊本病院に次ぐ、**県内4施設目の認定**です。

日本では、**脳卒中の73%が脳梗塞**であり、その治療では**1分でも早く閉塞した血管を再開通**させることが最も重要です。また、脳卒中の発症年齢は高齢であるため、今後も患者数の増加が見込まれます。PSCコア施設の要件として、24時間365日、救急隊や地域の医療機関からの要請に応じて脳卒中患者を受け入れ、迅速かつ的確な診断と**rt-PA静注療法**を含む治療を行うことが求められます。さらに、**血栓回収療法を行う資格を持つ医師が3人以上常勤し、常時対応可能**であることも必要です。

当院では、「**質の高い最新の医療を提供する**」という基本方針のもと、**血栓回収療法や血管内治療などの先進的な治療体制**を整えています。専門的な知識と技術を持つ医療従事者の育成にも力を入れ、地域の医療機関と密接に連携し、患者様に切れ目のない医療サービスを提供できるよう努めています。

今後も、高齢化に伴い増加が予想される**脳卒中患者に対し、地域の皆様が安心して受診いただける脳卒中治療の拠点**として、質の高い最新の医療を提供してまいります。



脳卒中センターおよび12階病棟スタッフ

市民公開講座レポート



令和6年9月15日（日曜日）に当院北館5階大ホールにおいて、第78回市民公開講座を開催しました。

今回は熊本大学心臓血管外科の福井寿啓教授に司会を務めて頂き、「知っておこう！心臓病の治療と予防」というテーマで、循環器内科医師、心臓血管外科医師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士のそれぞれの立場から、心臓病の最新治療から予防法・運動療法・栄養管理までわかりやすく解説させて頂きました。

当日は大変多くの市民の方々に参加頂き、満席となる大盛況でした。参加頂いた方からは、「あっという間の2時間だった」などの多くの好評コメントを頂き、改めて市民の方々の「心臓病」に対する興味の深さを実感しました。今後も、地域の皆様に向けた健康情報の発信を積極的に行い、皆様の健康をサポートしてまいります。

循環器内科診療部長 上村 孝史

こんにちは赤ちゃん

ご出産おめでとうございます

当院産科では、**かわいい赤ちゃんの誕生**で笑顔に包まれています。健やかに大きくなりますように。

出産をされるお母さんはじめご家族にとって良いお産となるよう、**職員一同全力でお手伝い**させていただいております。



R6.7.14



R6.7.18



R6.7.23



R6.7.23



R6.8.17



R6.9.13



R6.10.1



JCHO 熊本総合病院

〒866-8660 熊本県八代市通町10番10号

電話 0965-32-7111(代表)

FAX 0965-32-2772

URL <https://kumamoto.jcho.go.jp/>

発行日：令和6年10月20日

発行責任者：病院長 島田 信也